

## 自由図書部 優秀賞

川島拓輝さん 理工学部情報科学科 1年

『博士の愛した数式』 / 小川洋子, 新潮社

### 「文学と数学 奇跡の融合」

数学と聞いて、数多くの人は堅苦しいと思うだろう。理系の私でさえ時折そう思う節がある。抽象化された公式に加えて、数学の美しさや感動を教師が伝えることもない。このような背景があるから、あまり数学に対して面白いという印象を持つ人が少ないと思う。そんなレッテルを数学に貼っている人たちにぜひ読んでほしいのが、この本である。

この物語は、四人の個性的な人物でできている。家の離れで住んでいる風変わりな数学博士と、母屋で暮らしている冷淡な義姉、荒んだ家庭環境で育ち博士に雇われている家政婦、頭の形がルートに似ている家政婦の息子。博士は昔、交通事故に遭い、記憶が80分しか持たず、私服の背広にはたくさんのメモ用紙が張られている。そんな、博士のもとに家政婦がやってくる。最初は、博士とのやり取りに苦戦していたが、時がたつにつれ博士との距離も近くなっていく。この物語でのカギは、博士と家政婦とのやり取りだろう。家政婦が博士の離れを訪れるたびに、記憶喪失のため博士は決まって靴のサイズや生年月日を聞いてくる。そして、その数字がいかに素晴らしいかを家政婦に訴えかけている。最初は、そこには何の意味があるのか疑問に思う。しかし、物語が後半に差し掛かると、その会話はなぜ描写されていたかを暗示してくれる。私は、この種明かしをされたときに、何とも言えない驚きとつながりを覚えた。感動小説や推理小説のテンプレートの種明かしを数学でやってのけたのだ。これこそ、数学と純文学の奇跡の融合と言えるだろう。また、この物語にはオイラーの公式をある気持ちの表明にも使っているのだ。最初は、家政婦に対して軽くあしらい、一度は家政婦を誅にすることまで決断した義姉が、物語中ほどで博士にオイラーの公式を見せつけられたことで、態度が変わったことに読者は最初、疑問を抱く。後に詳細の定かでない義姉と博士の関係がわかる。文学から数学の美を、逆に数学から文学の美を映し出すこの物語は、奇跡の融合といっても過言ではないだろう。

私が、この小説を薦めるのは、文理問わず両方の人がこの物語の真髄に気付き、相反する学問の美点に気付かされるからである。先ほども述べたが、この物語では、数学から文学の良さがわかり、また文学から数学の良さがわかる。そして、この物語の作者は文系視点ですばらしさを語っているので、数学の教科書のような抽象的な説明を極力避けているので、スムーズに読めて、数学用語の説明が単純で理解しやすい。数学視点では、友愛数や完全数といった通常授業では教わらない数学の美しさを知ることができ、数学の魅力に益々惹かれるだろう。ほかにも、この小説では題名の割には数学の話題がそこまで多くないことも、特徴だろう。数学が時にこの小説の謎を解くカギになっているのにも関わらず、そこまでしつこく登場してこない。代わりに、登場人物の考えや感情が描写されている。この点において、従来の数学小説とは一線を画していて、普通の小説とあまり変わらずに読める利点があると考えられる。

この物語では、種の在り方や数学の在り方諸々を踏襲した作品で、学問の垣根を粉碎したものである。そんな新時代の小説をぜひ読んでみてはどうだろうか。